

子どもの思考力を育成する社会科資料活用 —複数の資料提示から情報を比較・分析・類推・統合する思考活動—

教育実践力高度化コース

17AD011

中野 大地

【指導教員】 桐谷 正信 安原 輝彦 大澤 利彦

【キーワード】 社会科授業 複数資料活用 思考力 資料特性 留意点

1. 問題と目的

1-1 社会の変化

我々が生きる現代の社会は、高度な情報化によって加速度的な発展を遂げている。急激な技術革新によって過去に不可能と思われていた多くの事物、事象が実現され「魔法の世紀」とも称されるほどである。今後我々は、様々な情報が錯綜し、何が事実で何が虚構なのかわからない世界を生きていかなければならない。この問題意識から、未来の担い手である子どもたちは、よりよい社会を実現するために、事実を正確に捉え、情報を取捨選択し、他者との対話と議論を経て、問題解決する資質・能力を身につける必要がある。

社会科教育における最大の目標は、子どもたち一人一人がよりよい社会の形成者としての「公民的資質」を育成することであり、「思考力」はその中核を成すものである。このことから、筆者は子どもたちに今後必要とされる資質・能力の構成要素の中で「思考力」に焦点を当てて研究を行った。

1-2 学力観の変化

知識基盤型社会と言われる現代において重要なのは「どれだけ知識を持っているか」よりも「知識をどのように活用できるか」という力である。独立行政法人大学入試センターが発表した試験施行問題の傾向を読み解くと、複数の情報や立場、論説を照らし合わせ、どのような答えが導き出せるか、という問題が多く出題されている。資料問題のウエイトを現行のものと比較すると約1.5倍に増加していると指摘されている。これらの変化は、子どもたちが身につけるべき学力観が変わってきたことを示している。これらの学力観の変化と未来社会に求められる資質・能力を明確に捉え、授業づくりを行う必要がある。本研究の目的は社会科授業における資料の複数提示を通して、子どもたちの思考力を効果的に育成する社会科授業のあり方を提案するものである。

2. 「思考力」の育成

2-1 定義

国立教育政策研究所の高口ら(2015)は、21世紀を生き抜く力を持った市民に求められる「21世紀型能力」を提案し、その重要な構成要素として「思考力」を中核としている。思考力を「深く考える力」と捉え、「一人一人が自分の考えを持って他者と対話し、考えを比較吟味して統合し、よりよい答えや知識を創り出す力、更に次の問いを見つけ、学

び続ける力」¹⁾であると示している。

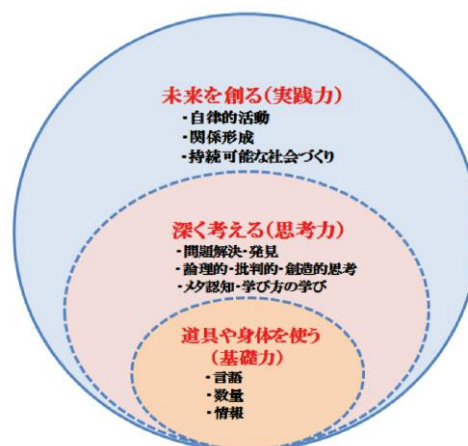


図1 21世紀に求められる資質・能力の構造一例¹⁾

2-2 学習者の思考を喚起する

学習における思考の生まれ方は授業全体を貫いて大きく影響する。実地研究Ⅰ・Ⅱにおいて、思考力を育成する授業づくり・実践に取り組んだ結果、子どもたちの思考力育成には、問題や課題に対して考えさせるきっかけづくりが、後の思考を大きく左右する傾向があることがわかった。思考を喚起・活性化させるためには、学習内容に関わる問題や課題を、学習者自身が自然発生的に疑問を持ち、切実に問題を捉えられるような入り口があると良い。この点で重要となるのが、授業の根幹となる「課題の提示」である。実地研究では様々な学習の入り口を検討・実践し、子どもの姿勢、表情、発言や取り組みの様子から、思考が活性化するプロセスの再整理を行い、思考活動の形骸化と自然発生的な思考の重要性について考察した。

2-3 思考プロセスの再整理

[1] 思考活動の形骸化

学習者には毎時間、課題を認識する場面が訪れる。この際、「課題の内容への認識」よりも「課題を与えられたという認識」のほうが上回ってしまうと、その時点で学習内容に意識が入るのに時間がかかるとともに、思考に制限がかかる。深い思考活動を実現するためには、学習に対する主体的なファーストイメージが課題提示よりも前に生成されると良い。学習者が学習内容について「何かを感じる」段階を経ずに学習課題の提示を行うと、学習者はまず「今自分はどういうことを聞かされていて、何を考えるのか」という学習の

現在地を把握する作業から始めることとなる。大きなタイムロスであり、学習課題は学習者にとって一旦遠いものと認識され、切実性が薄く、当たり障りのない思考となる。

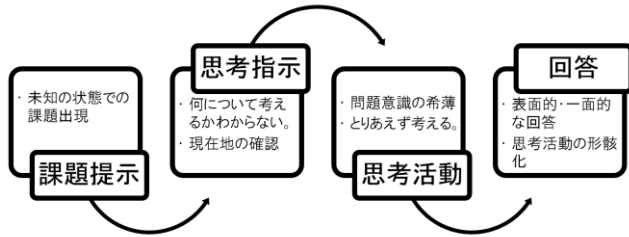


図2 作成：課題と学習の形骸化を招くプロセス

これが授業という環境に大きく依存した課題提示の形骸化を招く思考喚起のプロセスである。一方で目指すべき思考プロセスのあり方とはどのようなものなのか、以下のようにまとめた。

[2] 自然発生的な思考の重要性

先にも述べたが、深い思考を喚起するためには学習課題を認識する段階までに、学習者は一定のファーストイメージを形成している必要がある。ファーストイメージといっても文章でまとめられるようなきれいなものである必要はなく、あくまで漠然と「自分はこう思う、こんな感じがする」というような印象を抱くだけで十分である。これが後の資料活用や他者との対話活動によって幾度も吟味・修正・再検討が行われ、確固たる思考を創り上げる土台となる。我々も好きなこと、興味があることについては、自分が今何処にいて、どんな状況にあるのかということよりも考えが先行する。授業においてもこのような興味・関心をきっかけとした学習者が課題に対して「没頭」する場面が必要である。

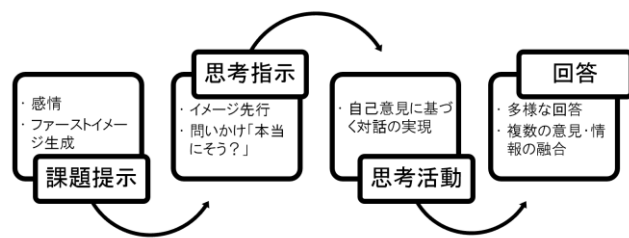


図3 作成：意見先行型の学習プロセス

学習者が身構えることなく、いつの間にか社会科の授業になっていた、ということが理想とすべき学びのきっかけのあり方なのではないか。

3. 社会科資料活用

資料を活用することは社会科の授業を行う上で、極めて重要である。授業で使用する資料はその存在や有する特性・与える影響について正しく理解し、扱う資料をどのように提示すれば学習場面に適切なものか、授業者側が深く考え、授業づくりをする必要がある。

3-1 資料の存在と使用時の認識

社会科においては多種多様な資料が存在し、文献や図像といった資料は生徒の学びを左右する重要な役割を担う。同じ資料を使用しても、授業の展開、流れ、提示するタイミング、見方や考え方によって、学習する内容や、学習者が持つイメージや受ける影響は大きく変化する。授業者は各資料がその特性から学習者に対しどのように作用するのかその大観を理解した上で、社会科授業を行う必要がある。

資料は子どもたちの学びの材料であると同時に、課題解決への手段やきっかけとなる大きな役割を果たす。授業づくりと実践に際しては、資料の形態特性と内容、影響を十分に理解した上で、活用する必要がある。なぜなら資料はそれだけの効果と影響力を有しているからである。ひとえに資料といえどもその形態や内容によって特性が異なり、それに伴って学習効果も異なる。子どもたちの学びを学習目標に即したより効果的なものにするためには、資料そのものの形態・特性を理解することが必要である。

3-2 資料の分類

社会科の授業で取り扱われる資料は様々な形態、特性、それに伴う学習効果を有している。有効な資料活用のためには、各資料の特性・効果、限界性を分析し系統的に理解する必要がある。社会科授業で使用される資料の特性を知ること、扱う際の留意点を把握することにより、資料の有効活用に寄与すると考える。社会科の授業で使用される主な資料は、大きく(1)文書資料、(2)図像資料、(3)実物資料に分けられる。図像資料はさらに写真・映像、考古、絵画、図表・グラフに細分化できる。これらを踏まえ、社会科における資料は、①文書 ②写真、映像 ③絵画 ④図表、グラフ ⑤実物と分類することができる。

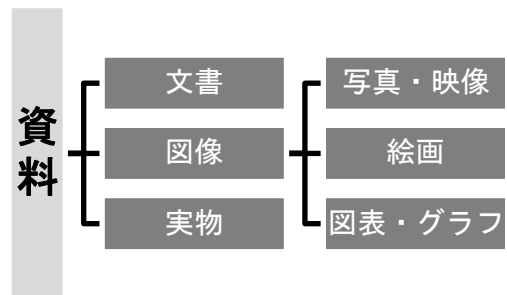


図2 作成：社会科授業における史資料分類

特に使用時注意を払わなければならないのが「絵画資料」である。なぜなら絵画とはそもそも、フィクション性の高い「芸術」であるからだ。絵画資料は、我々に豊かなイメージや感情を膨らませる力を有しており、鮮やかで奇抜な内容であればあるほど目を引きやすく、興味・関心を喚起することができることから、授業において活用されることが多いといえる。しかし多くの絵画の描き手は、現代を生きる我々が物事を学ぶために絵を描いていない。どんな表現でも認められる絵画資料は、描き手が特に表現したい部分を強調して

描いたり、無いものがあるように、あるものを無いように描くことができることに注意し、使用する必要がある。

4. 資料活用の視点と方法

4-1 歴史における資料活用の在り方

社会科は地理、歴史、公民の3分野から構成される。分野によってその目標や育成すべき力が異なることから、当然それに伴って資料の活用方法も変化する。歴史的分野において言えば、資料は歴史を学ぶ上で、不可欠な存在であると同時に、有する情報量と影響力は非常に大きい。なぜなら過去のことを学ぶためには、資料を現在の眼を通してみることにしかできないからである。

昨年度行った資料特性分析から、歴史的分野における資料の多くは、資料そのものの内容、生み出された過程が各時代の社会像、歴史的背景やイデオロギーと関わっていることがわかる。単体での使用はその資料が表現する世界に依存し、限定的・一面的な学習となる。そのため、授業では複数の資料を組み合わせ提示し、様々な情報と照らし合わせて活用することが求められる。このことから学習者に大きな影響を与えるセンシティブな存在と言える社会科資料は、思考をあらゆる方向へ誘導したり、制限することも可能である。資料活用の際は、子どもたちの身につけさせたい力に基づいて精選することが必要である。

4-2 複数の資料提示

授業において複数の資料提示をする際、使用する資料については以下の選択方法が考えられる。

- ・異なった形態と特性（例：文書、写真、図表）
- ・地理、歴史、公民の3分野からの視点
- ・相反する意味や意義を有するもの

一つの意味を有する資料のみでは、論理的な判断をすることは難しい。相反した意味を有する資料を提示することで学習者の思考が一つに固まらず、多様な意見を生み出すことができる。資料選択する際、以下の留意点がある。

【資料精選における留意点】

- ・授業者自身が諸資料を批判的に捉える視点を持つ。
- ・絵画（風刺画）の影響力と危険性について常に意識する。
- ・資料とは、特定の人物や組織、または自然が創り出した過去のものであるが、そのほとんどが「主観的」なものであるため、学習者の思考を固めないために多種多様な見方・考え方を駆使できるよう多種多様な資料を複数選択する。

4-3 思考活動の在り方

①思考活動の土台づくり

思考をする際、学習問題に対して論理的に考えるための土台が必要である。問題の内容を理解できなければ、論理的な思考を働かせることはできない。問題の所在を把握し、どこに問題があるのか、どんな問題なのか、それはどのように問題なのかを捉えなければならない。思考の土台をつくるには、まず授業者が子どもの立場と目線からの発問をし、展開することが求められる。

②段階的な思考プロセス

授業実践によって、どのような段階を経て考えを導き出

すのか、学習者がしっかりと認識しながら学習することが、思考力の効果的育成につながるということがわかった。実践した思考プロセスについては以下の授業実践とともに論じる。

5. 社会科授業づくり

実地研究Ⅰ・Ⅱにて「複数の資料活用」「思考力育成」に基づく授業実践を行い、分析と考察を行った。

5-1 3つの視点

国立教育政策研究所が掲げる育成すべき思考力に基づき、授業づくり・実践において以下の視点を設定した。

①複数の資料から思考する。

センター試験施行問題からわかるように、今後も求められる「思考力」を育成する資料活用授業では、原則として複数提示する必要がある。我々は現存している資料からでしかものごとを認知することができないという時点で、過去を知ることにおいて常に限界がある。この限界から、資料を提示にあたっては、多様な人々による複数の視点から見た事象の状況、同一の事象に対する異なった論説、一つの学習問題を地理的・歴史的・公民的な視点から捉えられる視点を内包させる必要がある。資料を複数活用することで内容がそのまま子どもたちの知識としてインプットされることなく、情報を照らし合わせ、資料との対話を経て、論理的に考えることが可能となる。授業者は学習者の自由で創造的な思考ができる時間と空間を可能な限り作り出す必要がある。主体的・対話的にする時間と空間を作るのは授業者、ふかい学びを実現するのは学習者自身である。

②明確な根拠に基づき、思考する。

思考活動をする際、「根拠」の存在が非常に重要である。様々な事柄について思考する際、何故そう思うのか、どの部分に基づき考え出したのか、という点を明確に示すことができなければならない。根拠なくしては論理性のない、単なる自由思考に陥るからである。ただ考えたいように考えるだけでは、本質的な思考力の育成につながらず、学習指導要領に示されている内容から逸脱する状況にもなりうる。このことから、学習者自身が「根拠の重要性」を十分に意識しながら取り組むことが必要である。

授業を重ねていく中で、学習者自身が根拠の重要性を認識できる指導を実践し、改善を繰り返して学習活動を行った。結果、思考活動は論理性が伴い、ふかい思考活動を展開することができた。

③《思考プロセス》複数の情報を比較・分析・類推し、統合する。

複数の資料から得た情報から思考を働かせ、意見を導き出した後は、個々の意見が事実に基づく適切なものであるかを、他者と吟味し、より高次の思考へとブラッシュアップする思考プロセスが必要である。そこで導出した自己意見が主観的なものではないか、矛盾が生じていないか、一面的なものとなっていないかという点を他者との対話のなかで発見し、修正する思考活動を設定した。各々が「自分は資料のこの部分を根拠として、このように読み取り、思考した

結果、このような意見を持った」という自らの思考の形跡を他者へアウトプットする。《思考プロセス》は複数の情報を①比較②分析③類推④統合するという流れをとる。

①「比較する」では、他者の意見を共有し、互いにどんな思考から意見を導き出したのかを把握し、自分の意見とどのように異なるのか、また類似しているのか発見する。

②「分析する」では、互いの思考を把握した後に、導出された意見について互いの類似点や相違点、生じた疑問点や賛成・反対意見を出し合い、論理的かつ批判的に分析を行う。この段階を経て、互いの思考の細部が固められる。

③「類推する」では、比較・分析を経た互いの思考のどの部分がどのように類似しているか、また、複数の思考からまた別の表現をすることができないか、と推し図る活動を行う。複数の情報(思考)を照らし合わせ、分類したり、かけ合わせたりすることで新たな見方・考え方が生み出されることが期待できる段階である。

④「統合する」では、これまで行ってきた対話活動を通して、共有した互いの思考を組み合わせる活動を行う。各々が証拠に基づく論理的かつ批判的に作り上げた対話の成果を組み合わせたり、融合させたりすることで、これまで存在しなかった新たな答え(新価値)を創出する段階である。現代社会は明確な答えの無い複雑な問題が山積している。社会科の授業においてこそ、これまでになく新たな解決法、結論づけを行う学習がより一層重要となる。

6. 社会科授業実践

実地研究Ⅰ、Ⅱにおいて、本研究目的に即した授業づくりと実践を行い、結果に基づく分析と考察を行った。その中の2つの授業実践を以下に示す。

6-1 実践1：歴史的分野「満州事変と軍部の台頭」

本実践は実地研究Ⅰ 埼玉大学教育学部附属中学校と実地研究Ⅱ 川崎市立富士見中学校の2校で同じ授業を行った。

[1] 本実践のねらい

各時代を生きた人間たちはどのような意図を持って行動し、結果として歴史的事象が生まれたのかを、当時の状況、背景、因果律、過程がわかる複数の資料を活用し、根拠をもって自分の考えを導き出す。

[2] 教材について

各時代に存在した人間たちの思惑や行動の起源を根拠に基づき思考することは、歴史を学ぶことを通して市民的資質・能力を伸ばす上で極めて重要である。満州事変という歴史的事象から、当時人々が下した決断と行動の理由を探り、様々な人為的事象が発生する必然性を考えることで論理的な思考力を育成するねらいのもと教材開発を行った。

[3] 工夫点

① 発問の焦点化

時間的な制約がある場においては、発問をより具体化し、学習者がピンポイントに問題把握をすることで効果的に思考活動を展開できる。

附属中学校：「なぜ、当時の日本は満州事変を起こしたのだ

ろう？」 ⇨ 富士見中学校：「日本軍が『満州の地』を欲した理由は何だったのだろうか？」

上記のように、「満州という地を欲した理由」という具体的な地名と当時の人間が行動に及んだ原因を意味する文言を加えることで、当時の状況と人々の考えはどうかという疑問を学習者に印象的に掴ませる事ができた。

② 資料提示方法の改善

実地研究Ⅰ 附属中学校で本実践をした際、可能な限り多くの資料をプリントにまとめ、学習活動を行った。資料そのものについては文章資料は口語訳とし、学習者自らが現代語に変換する作業も必要あるよう提示をした。多くの資料をまとめた資料プリントが以下のものである。



結果、限られた時間の中、膨大な情報量と読解難易度の高さから思考が深まらないという課題が生じた。提示資料は多ければ良いものではないこと、当時の文章表記であることよりも、内容を理解し、思考することが重要である。この課題から実地研究Ⅱ 富士見中学校では、提示資料を地理・歴史・公民の視点から以下の3つ絞り、学習活動を行った。



[4] 構成と展開

複数の資料から、当時日本が満州の地を求めて起こした軍事行動の理由を考える。

【個人での思考活動】

第一段階：既存の知識のみでの記述。

学習者が既存の知識、情報からわかることや考えられることを簡潔に記述する。

第二段階：解決のカギを用いた思考活動。

本学習内容に即した文章資料、地図資料、写真資料とこれまでの学習内容を組み合わせて思考し、記述する。

【全体での思考の共有】

個人で思考したことを全体で発表。

[5] 提示資料

- ① 文書資料（当時の日本、世界情勢についての状況）
- ② 地図資料（日本と満州、近隣諸国の位置）
- ③ 写真資料（満州に存在したもの）

[6] 分析と考察

本実践では、3つの資料を提示した。3年生3クラス分の授業プリントを回収、集計した結果、一つの解答欄に複数の資料から考えだした記述が多く見られた。

〈生徒による記述〉 ※一部抜粋

- ・世界恐慌の後で景気回復したい！
- ・昔、南満州鉄道を設立していたので、足をふみ入れ易かった？
- ・ロシアやモンゴルなど他の国に近く、製鉄所や炭鉱など、戦争に必要なものがそろっていたから。
- ・日本とソ連の間だから。中継地にしたい。
- ・～利益を得るために製鉄所などがあり中国やロシアを攻めやすい満州にした。
- ・すみや鉄をとれる満州を中国やソ連にとられる前に日本の植民地にしたかったから。
- ・日本は他国に比べて小さい、自給率も少ない。～経済が悪い日本には都合良かった。
- ・満州が4国にめんし、海にもめんしているから。
- ・ロシアにたいこうするため満州にした。過去に戦争で勝っているためゆり的な地域だったのでは。
- ・遼東半島もなにか関係していると思う。

本時の内容と3つの解決のカギだけでなく、これまで外交方針や行動などを満州事変まで一連のつながりとして捉えている。また文章語尾に「？(クエスチョンマーク)」をつける記述が多く見られた。これは記述した内容について「自信はないが、こうではないだろうか」という本人なりにきちんと思考を働かせた結果ではないかと考える。

[7] 本実践の成果・課題

【成果】

上記の内容からわかるように、3つの資料を比べ、組み合わせるとともに提示資料の内容を超え、これまでの歴史の流れや本時には出てこない歴史的な事象や他国との関係性をつなげて考え、意見を創り出している記述が多くあった。資料から発見したことに留まらず、新たな疑問を抱き本時のメインテーマである「満州事変」という歴史的な事象を中心にその周辺にある事象の因果律や当時の社会情勢等と絡めて思考を働かせていた。このことから性質の異なる複数の資料を提示し、活用する思考活動は、学習者の思考力を働かせる相乗効果を生み出す効果的方法であると結論付ける。

【課題】

① 根拠の重要性

学習者自身が「根拠の重要性」を意識していない。どの資料のどの部分に基づいて導き出されたのか学習者が認識しながら取り組むことができる学習活動の在り方とワークシートの改善と根拠資料を明記する手立てが必要である。

② 思考過程の可視化

学習者が記述した一つ一つの思考はどの資料に基づき考え出されたのか、という根拠の所在の判断が難しいという点が生じた。ワークシートの集計と分析によって推測はできるものの、思考過程を正確に捉えることはできない。複数の資料を「どのように読み取ったか」が見取れる工夫が必要である。新たな課題を踏まえ、以下の実践2を行った。

6-2 実践2：公民的分野 第1章 導入「スーパーマーケット・コンビニから『〇〇社会』を探せ！」

[1] 本実践のねらい

教科書的な内容を忠実に捉えるのみならず、子どもたちが複数の資料や個々の思考を様々な面や角度から考察し、それらをまとめた上で創造的な思考を使い、新たな価値を付加した答えを導き出す。

[2] 教材について

スーパーマーケットやコンビニは依然として現代人が生活を支えるライフラインと言える商業施設である。現代人のニーズを敏感に察知し、様々なサービスを提供するこれらの商業施設について思考することは現代社会を如実に捉えることに適していると判断し、教材開発を行った。

[3] 工夫点

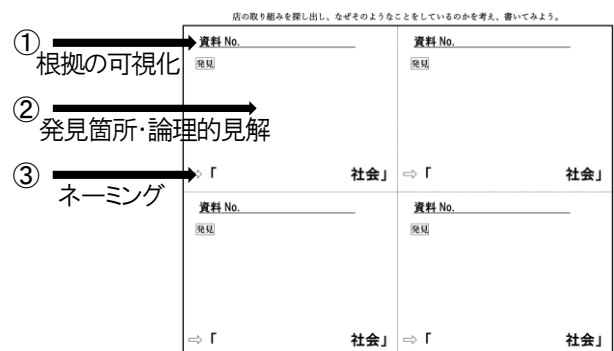
- ① 思考活動（個から複数へ思考の共有）
- ② 他者との対話（個々の思考を比較・分析・類推する）
- ③ 新価値の創出（思考を統合し、新たな答えを創り出す）

[4] 構成と展開

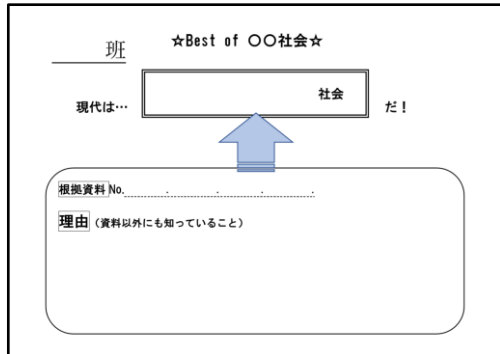
3～4人グループをつくり、3ページ1セットの資料を配布し、活動を行う。配布資料はスーパーとコンビニが行っている消費者のための取り組みが読み取れる内容である。

【個人活動】（社会の特徴発見＋ネーミング 最大4つ）

配布資料から、現代社会の特徴を探し出す。発見した特徴に基づき、「〇〇社会」とネーミングをする。この際、根拠を明確化するため、基づいた資料番号を明記するよう指示をした。



【グループ活動】(グループ「Best of ○○社会」の決定)
 個々が創り出した「○○社会」について、明確な根拠に基づきグループで共有する。この際、《思考プロセス》に沿って対話活動を行い、「Best of ○○社会」を決定し、各グループの決定を学級全体で共有する。



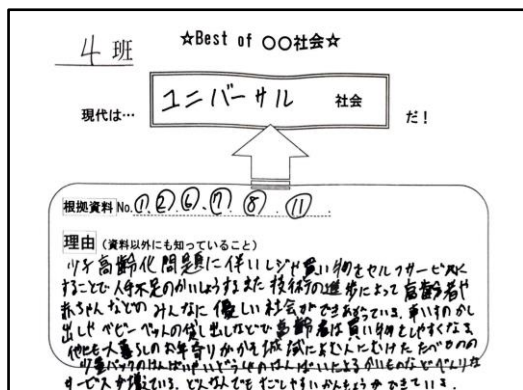
[5] 提示資料

①惣菜のグラム単位の量り売り、セルフ販売②会計時の液晶パネル、無人レジ③全国名産品の陳列棚④手書きの値札、デジタル値札⑤海外輸入菓子⑥車イスの貸出サービス、呼びかけ看板⑦ベビールーム、育児相談室⑧おかず少量パック、少量惣菜チラシの一部分⑨コンビニ ATM⑩スマホ決済、マネーチャージ場面⑪コンビニ移動販売(小型トラック)⑫電子マネー、プリペイドカード⑬コンビニ併設24時間営業コインランドリー

[6] 分析と考察

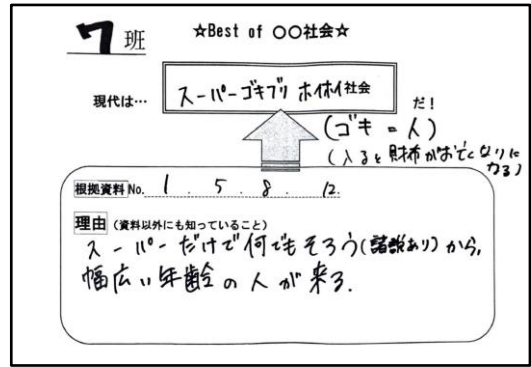
各グループから多種多様な「Best of ○○社会」が創り出された。研究課題における「思考力」から3つの興味深い回答を精選し、分析を行った。また、簡易的に本研究の狙いに即した3段階の評価を行った。

①ユニバーサル社会



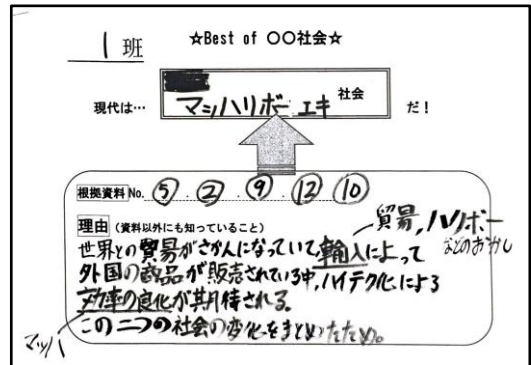
1つ目は「ユニバーサル社会」である。このグループはたくさんの方々の社会の特徴を集め、それぞれの意見を組み合わせ、総合的な表現で社会をネーミングした。また、一人ひとりが自己意見を表現し、活発に対話活動を行っており、根拠資料を6つ明記し、それらの内容を明確かつ具体的に示している。しかし、記述内容は教科書領域内に留まっており、それぞれの思考を統合し、新しい答えを導き出すまでには至っていないことからこの回答例はB評価とする。

②スーパーゴキブリホイホイ社会



2つ目は「スーパーゴキブリホイホイ社会」である。このグループは、自由に思考するということを認識しすぎるがあまりに、根拠の重要性を意識していない。かつその記述内容も、スーパーやコンビニから見える社会の片面的な特徴だけにとどまっていることからこの回答例はC評価とする。

③マッハリボーエキ社会



3つ目は「マッハリボーエキ社会」である。このグループは、前グループとは大きく異なった回答をしている。根拠資料を5つ明記しており、社会の特徴を大きく2つの面を挙げ、分析・記述している。1つ目の面=⑤海外輸入菓子→貿易が盛ん、2つ目の面=②会計時の液晶パネル、無人レジ⑨コンビニ ATM⑩スマホ決済、マネーチャージ場面⑪コンビニ移動販売(小型トラック)⑫電子マネー、プリペイドカード→ハイテク化による効率の良化、としている。

このグループで注目すべきなのは、「輸入」と「効率の良化」の部分に下線を引き、強調し、記述している点である。また最後の一文「この2つの社会の特徴をまとめたため」としている。このグループは、複数の根拠資料から社会の特徴を読み取り、それらを自分たちなりの言葉として、効率の良化を「マッハ」、輸入が盛んなことを「貿易」と変換し、表現している。ここで非常に興味深いのが、「マッハリボーエキ社会」というこれまでに存在しない現代社会のネーミングである。複数の社会の特徴を挙げるだけにとどまらず、マッハとボーエキを上手く結合している、「ハリボー」という言葉に注目したい。このグループに話を聞くと、これは資料⑤のスーパー商品棚に写っているドイツ老舗菓子「HARIBO」を読み取ったものだという。「マッハ」「ハリボー」「ボーエキ」という3つの要素を組み合わせたこの回答は、複数の資料から生み出した思考を比較・分析・類推・統合というプ

プロセスを経て新しい価値を創造したと判断できることからこの回答例はA評価とする。

以上、回答を3つ例示したが、その他にもたくさんの興味深い回答が発表された。

〈各グループから出た〇〇社会〉

スマホ社会、ピッピ社会、ロボット社会、交流社会、電子社会、少子高齢化社会、ユニバーサル社会、増客対企業社会 All People 社会、最先端技術社会、おじおば社会、個々別々ハイテク社会、Made in World 社会、個人誘惑社会…

それぞれのグループから多種多様なネーミングが出現し、全体共有の時間は様々な声が飛び交い、時間が足りなくなるほどに盛り上がる展開となった。本実践を通してたくさんの興味深い「〇〇社会」が創られた。これは学習者が自らの考えに基づき、他者との対話を通して、これまでにない新たな答えを創り出したということにほかならない。

[7]本実践の成果・課題

【成果】

本実践におけるねらいのもと、授業を行った結果、学習者が今後の社会を生き抜く上で必要な思考領域を拡張する「方法的な知識」を得るきっかけとなる学習ができたと考ええる。各グループごとに思考の深まりの差は生じたものの、①思考活動②他者との対話③新価値の創出、という3つの工夫点に沿って思考活動を行ったことで、学習者は明確な根拠に基づき創造的な思考を働かせる経験を積むことができた。考察にも示したように、複数の資料から「現代社会の特徴」という情報を適切に読み取り、社会を複数の面から捉えられているグループが現れた。今後も本実践の複数の資料提示と思考活動の要点を取り入れた授業をすることで、効果的な思考力の育成が期待できると考える。また今回の実践から、どのグループも同じ資料を見ているのにもかかわらず、多種多様な社会的な見方・考え方を駆使した思考活動が展開される結果となった。本時の学習から生まれたたくさんの「〇〇社会」は、これから公民的分野で学んでいく、まさに「今の社会」を捉えたものとなっている。今後単元を貫いて学習を構成することができるのではないかと新たな学びの可能性も見出すことができた。学習者自身の創造物からスタートする学びは、思考力の育成において高次の学習効果を生み出すことに寄与すると考える。

【課題】

本授業は個人活動→グループ活動から1つの答えを導き出す学習である。グループ活動以前の個人活動の際、個人記述を見回ると本質的かつ独創的な思考と記述が見られた。グループの対話活動以前の個人活動で発見された「〇〇社会」についてすべて把握したところ、社会の本質を明確に捉えた意見があるにもかかわらず、グループ活動で採用されなかったものが多く存在した。対話活動の結果であることから必然的部分もある。しかしこの「個人意見の埋没」という問題によって、安定的な表現に留まるということも事実

としてあった。これは独創的な答えに自信がないからなのか、間違ふことへの回避であるのか断定はできないが、思考は個々異なって当然であり、自由であるからこそ価値があるということを学習者自身が理解し実践できる学習環境を日頃から作っていくことも必要である。個人で発見し生まれた思考を全体へ還元する工夫と手立てを加えることでさらなる高次の学びになると考える。

7. 研究成果・課題・解決案

7-1 成果

本研究は、複数の資料活用を通して学習者の思考力を効果的に育成することを目的としたものである。実地研究Ⅰ、Ⅱの授業実践において、複数の資料から有用な情報を取捨選択し、根拠に基づく思考活動と他者との対話を経て、学習者自身が新たな結論、答えを導き出すという学習を行った。本授業実践での「複数の資料からどのようなことが言えるのか、考えられるのか」という思考力を働かせる学習は、よりよい社会の形成者に必要な資質・能力の育成に必要な不可欠であり、社会科授業において実践していくべきであると考える。

複数の資料を活用した思考活動は、様々な情報が飛び交う社会をよりよく創り上げていくために必要な論理性、批判性、創造性を養うことに適している。社会科授業においては、授業者が多種多様な資料の種類、特性、形態を勘案した上で吟味・精選・提示することで学習者の思考を効果的に刺激し、学習が深まる。資料活用の視点として、学習者が当たり前の答え、あるべき答えを容易かつ即座に推測できてしまうような資料ではなく、「この考えも正しそうだ、いやその考えもあり得るな」というように、学習者が良い意味で右往左往し、問題・課題を発見できる資料を提示することが効果的となる。主体的な発見を契機とした思考プロセスを仕向けることが効果的な思考力の育成において極めて重要な点である。

これまで述べてきた比較・分析・類推・統合という《思考プロセス》から学習者は明確な根拠に基づき自己意見を持つ→他者と対話をする→新たな答え(新価値)を創り出すという経験を積むことで今後の社会に必要な思考力を培うことができると述べてきた。思考力を育成する為の資料活用にあたっては、次の3点が特に効果的であると考えた。

- ・多様な特性・形態・意味を有する資料の複数提示
- ・即座に明確な答えが出そうもない内容の資料選択
- ・《思考プロセス》に基づく段階的思考活動

社会を創造していく子どもたちは、社会的な見方・考え方を駆使して社会的事象について選択・判断・意思決定する力が必要である。今後、適切な選択・判断・意思決定をするためには本研究で述べた「思考力」を活用した学習とその経験を積むことが必要不可欠だ。その際には論理性、批判性、創造性という思考力の重要な構成要素が伴わなければならない。上述のことを核として行った本実践研究は、学習者の「思考力」を伸ばす一助となる取り組みができたと考える。

7-2 課題

思考活動の展開や方法、他者との対話活動について、学習者の理解度のばらつきが生じた。どのような切り口から思考活動、対話活動を行うか、どのような過程から、どのような答えが創られたかという観点を学習者が予め捉えられる工夫が必要であると考えた。そこで、思考学習に取り組む際に、学習者自身が比較・分析・類推・統合というプロセスを意識して進めることで、学習が更に深化し、思考力の効果的な育成につながるのではないだろうか。このことから、本実践で行った個人活動からグループ活動、そして新たな答えの創出までの思考活動における評価の在り方を学習者側にも明確に意識できる要点を設定し、学習者と授業者双方が評価の観点を認識することで、学習者が更に効果的に思考活動を展開し、問いに対して本質的な他者との対話活動を実践することができると考えた。

7-3 課題に対する解決案

本実践を通して生じた課題から、思考活動をよりよく展開させるためには、段階的活動における評価を設定することが効果的であると考えた。授業実践から、思考活動における段階別ルーブリックの一案を作成した。学習者と授業者双方が、各段階における要点を明確に認識することで、より高次な思考を働かせることができると考える。

評価

A	十分に到達できている。
B	一部到達できている。
C	努力を要する。

①比較

自分の意見と他者の思考を共有し、比べ、発見する。

[例]・類似点、相違点はどこかを見つける。

- ・疑問点、興味深い点を見つける。

A	自分と他者の意見の異同がどの部分に存在しているのか正確に捉え、新たな意見や疑問を持っている。
B	自分と他者の意見の異同を正確に捉えている。
C	個々意見を述べ合っている。

②分析

比較から生まれた互いの意見の要点に基づき、その思考と過程について議論を行う。

[例]・発見した点がどのように似ているのか、異なっているのかを話し合う。

- ・疑問点や興味深い点を質問・議論し合い、それについて検討・吟味する。

A	個々の意見の異同を把握し、互いに発見・疑問点、賛成・反対意見を論理的かつ批判的に述べ合い、共通理解を図りながら意見をブラッシュアップしている。
B	個々の意見の異同を把握し、互いに発見・疑問点、賛成・反対意見を論理的に述べ合っている。
C	互いの意見について見解を述べ合っている。

③類推

互いの思考の十分な理解から内容を分類し、新たな見方・

考え方を押し図る。

[例]・話し合いを経た複数の思考を分類する。

- ・思考を様々な角度から推察し、更に適切な表現に変換してみる。

A	共有・理解した互いの思考を様々な面や角度から議論し、分類わけをしたり、組み合わせたりして、より適切な表現に変換してまとめている。
B	共有・理解した互いの思考を様々な面や角度から議論し、分類わけをしたり、組み合わせたりしている。
C	互いの思考をまとめている。

④統合

対話から練り上げられた複数の思考を組み合わせ、新たな答え(新価値)の創出する段階。

[例]・対話によってブラッシュアップされた複数の思考を足したり、掛けたりしてみる。

- ・創造的思考を働かせ、従来には無かった答えを創ってみる。

A	これまでの思考活動の中で個々の考えを組み合わせたり工夫して変換したりすることで、これまでになかった独自の新たな答え(価値)を創り出している。
B	これまでの思考活動の中で個々の考えを組み合わせたり工夫して変換したりすることで、答えを導き出している。
C	対話活動によって答えを導き出している。

8. おわりに

本研究の実践と結果から、複数の資料提示と段階的な思考活動は、学習者の思考を効果的に働かせ、新たな思考の範囲を広げることが可能であることがわかった。現代社会は、明確な答えのない問いに溢れている。これらの問いと対峙していくこととなる子どもたちは、「自分の頭で考え、それを他者との対話の中で新しい答えを導き出す力」が必要となる。このような力は、一朝一夕に身につけられるものではなく、子どもたち自身が日頃の学びの場において、活発に思考活動をしていく経験を経て培われる。そのために、社会科教育を担う我々が、「社会的な問題・課題について深く考え、根拠に基づき他者と対話し、新しい答えを創り出す」という視点から授業づくりと実践をしていくことが重要となるのではないだろうか。このことこそが、子どもたちの「公民的資質」の育成、そしてより良い未来社会の実現に大きく寄与していくものと考えられる。

【参考資料】

・引用文献

(1 高口努 研究代表(2015)『資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書 1～使って育てて 21 世紀を生き抜くための資質・能力～』国立教育政策研究所

・参考文献

国立教育政策研究所編(2016)『資質・能力[理論編]』東洋館出版社